
IS～インフィニット・ストラトス～別の世界の自分に憑依した青年の大活劇

かたがわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〈インフィニット・ストラトス〉別の世界の自分に憑依した
青年の大活劇

【Nコード】

N 6 5 9 3 Y

【作者名】

かたがわ

【あらすじ】

ある日謎の穴に愛車と一緒に吸い込まれて別の世界の自分に憑依してしまった青年は、“IS〈インフィニットストラトス〉”という女性にしか操作できない兵器を使える唯一の男性になってしまった。

そこで青年はいったい何を見るのだろうか。

オリジナルキャラ設定

氏家 達也

今作の主人公。IS学園の1年1組に所属。クラス代表。

7月5日生まれ。身長は172cm。直死の魔眼所持。

使用車種“MR2・AW11”。

元走り屋で、日本中の峠を制覇していった“プロジェクトD”のダ
ウンヒル担当の

エースドライバー。

引退した後も実力は衰えない、というより前よりも強くなっている。

今作では謎の穴に愛車ごと吸い込まれ、何らかの影響で別世界の幼
い自分に

憑依してしまった。

頭の回転は早く、どんな危機でも必ず解決の糸を引っ張る。

力もチートで、太陽系をも吹き飛ばす程の力を持っているが、普段
はリミッターをつけている。

イケメンに加え人の心の機微に鋭く、境界線の無い優しさで女性を
ときめかせる

言動や行動を見せる事から学園の内外を問わず数多くの女子に好意
を寄せられている。

が、やはり主人公よりしく鈍感である。

御筆 秋夫

“プロジェクトD”リーダー。既に結婚済。20歳。
使用車種“スカイラインBMR32GT-R”。

達也を悪魔の道こと走り屋の道に誘った奴で、2chのやらない夫
と性格が似ている。

というか顔も形もほとんど同じだと思ってくればいい。
クーガー達いつもつるんでいる。

前は日の出峠では最速の名を冠しているが、達也に破られている。
「巨乳メイドはロマンだろ常識的に考えて」

ストレイト・クーガー

CV：津久井教生

文化的二枚目な兄貴。プロジェクトDヒルクライム担当エースドラ
イバー。世界三大兄貴。

使用車種“ホンダS2000”だが「ラディカル・グッドスピード」
という

アルター能力を使用して車を再構成し、速く走らせることができる。
(ただ、すつごくゴツイボディになる)

元暴走族特攻隊“ホーリー”の隊長。「速さ」と「文化」に異様な
までの執着を見せる奴。

彼にとって速さは美であり、見事な早口で喋る。

速さを求め続ける誰もが認める最速にして、最強の兄貴。

そして、愛すべきバカ。

「俺が選んだ俺の道だ、それを最速で突っ走って何が悪い！」

カミナ

CV：小西克幸

プロジェクトDメカニック担当。天元突破兄貴。婚約済み
使用車種“マツダ・RX-8”

物事は全て「気合い」で片付くと信じている精神論者。

髪型ととんがった真つ赤なサングラス、上半身に彫られたタトゥー
が目印。

プロジェクトDの中では常識人だが常識人ではない。

自らの命をかけてまで檄をかけ、死んでも檄を加える姿は正に漢（
死んではないが）。

そしてバカ。

「お前を信じる！俺が信じるお前でもない、お前が信じる俺でもない、
お前が信じるお前を信じる！！」

ランサー

CV：神奈延年

プロジェクトDメカニック担当。敏捷性に優れた槍使い。通称・ラ
ンサー兄貴。

真の名前はケルト神話の光の皇子クーフリーン。結婚済。

使用車種は“スバルインプレッサ・GC8 STIバージョン”

根は実直で、口は悪いが己の信念と忠義を貫く、英霊らしい英霊（
今は人間）。

趣味は魚釣りやナンパだが、ナンパするたびに嫁さんに殴られる。

「どーもー！青タイツですー！」

第一話・プロローグ（前書き）

とあるスレのキャラの設定を使用させてもらう許可を取ったので投稿させてもらいます。

ただ兄貴達はまだ登場しませんのであしからず。

第一話・プロローグ

——場所・何処かの草原

「秋夫よ……なぜ此処に？」

「たまたま此処に寄っただけだろ」

街外れの草原に寝転がっている青年は気だるそうに隣に居る青年“御筆秋夫”に喋りかけた。

「……何かスリルな事が起きないのかね？」

「……それってフラグだろJK」

青年は露骨に“どっかの異世界に飛ばされるフラグ”を立ててしまったらしい。

現時点ではそんなことは青年は知らないが。

「さて戻るか……秋夫はどうするんだ？」

「……俺も戻るに決まってるんだろ…純夏的に考えて」

彼ら達は立ち上がり、自身の愛車の置いてある場所に向かった。

「ついでに俺は“氏家達也”っていう名前だから」

「誰に話してるんだろ」K」

「そりゃ読者様に決まってるんだろっが」

「おk、把握しただろ」

「おつ、達也、久しぶりじゃねえか」

「よっ、ランサー、久しぶりだな」

「まったく、風邪なんか自慢のドリルでぶち抜け！」

「無茶言うなカミナ、お前みたいにドリルなんかもってねーし
どう風邪をぶち抜けばいいんだよ」

「おい達也、風邪は最速で、美しく治すもんだぜ」

「お前も無茶言うなクーガー」

「ははっ、やっぱり俺達は揃わなきゃだめだろ常識的に考えて」

最速で治せといってるのは、スピード狂でアルター能力という物を持っ

世界を縮める男（笑）“ストレイド・クーガー”

JK（常識的に考えて）といっているのは、達也を悪魔の道（笑）
に引きずり込んだ

我らがリーダー“御筆秋夫”

ドリルで風邪を治せといってるのは、この中の常識人であり
（マジで）気合で天元突破する男“カミナ”

最初に達也に話しかけたのは、どっかでは伝説だった英雄

“ランサー”（ランサーは偽名）

実は我らが主人公？、達也は二日前までは風邪を引いていたのであった。

それが治り、ようやく復活したのであった。

「さて、久々に走りますか——」

ピキーン

「んっ！今何かフラグがたったような……」

「この感じは……まさか！」

もう既に立っているフラグを感じた達也は後ろを振り向いた。
そこには……。

「なんか、穴が在るんだが……」

そこには●があつた。

全てを吸い込む丸い穴。

その●に、愛車が吸い込まれてゆく。

「あつ、おい！俺の車が！」

「くそつ、俺たちも引つ張られているぜ」

「くつ、ダメえら！大丈夫か！？」

「何とか槍にしがみ付いてる！が、そろそろヤベエ！」イチチチチ

「くそが！あの穴め、俺の車を吸い込もうとしやがって……」テガイタイ

「しっかりトイレいっとけばよかったぜ……」ハラガイテエ

「こうなりゃ——」

「こうなりや、車の中に乗れ！
どうなるかわからないが、逝くだろJK！」

「「「「おうっ！」「」「」

秋夫の掛け声と同時に吸い込まれかけている車に乗り
達也以外、車をバツクした。

「んっ、どうした達也？！」

「半分吸い込まれてやがる。

こうなりやヤケだ！突っ込んでやる！」

自殺行為だ。

秋夫はそう叫ぼうと窓から顔を出した。
だがもう既に――

「うおおおおおおお！！！！！」

●に突っ込んでいた。

「「「「たつやあああああ！！！！」「」「」

今この瞬間、氏家達也はこの世界から消えた。

第2話・憑依した俺と誘拐（前書き）

前回のISは

『……何かスリルな事が起きないのかな？』

『おっ、達也、久しぶりじゃねえか』

『なんか、穴が在るんだが……』

『たつやあああああ……！』

第2話・憑依した俺と誘拐

——何処かの監禁場所

「達也っ！大丈夫か！？」

「おっと、動かないでくださいますか？」

幼い達也を助けようとするナニ力を纏った女の人と、達也を腕に捕まえているナニ力を纏った女の人が対峙している。

達也を捕まえてる女の人は達也を人質にし、助けようとしている女の人の動きを止めさせている。

「ぐっ、達也を放せっ！」

「断ります……」

断固拒否。

「うつつ……おねえ……ちゃ……」

「達也あ！……くうつ……！」

達也を助けようとしているのは“織斑千冬”であり。どう助けようかと思いを巡らせたところで——

——達也に異変が走った。

「ぐっ……あがっ……ぐああ……」

「んっ……どうしたんだ達也!？」

「これは…いつたい……」

達也に起こった事を説明しよう。

無限に連なる平行世界のどこかより発信されたもう一人の同じ存在である青年“氏家達也”という存在を、幼い“織斑達也”という器に憑依する。

瞬間“氏家達也”は“織斑達也”の幼い体に合わせて元の体と同じくらいの身体能力に作り変えた。平行世界の同位体、青年である“氏家達也”が幼い“織斑達也”の存在を丸ごと塗りつぶした。

ここに、氏家 達也は誕生した。

カツと目を開き、辺りを見回した。

視界に映った映像は何処かの倉庫。

達也の主観では謎の穴に自身の愛車であるAW11ごと吸い込まれていたのだが、

その痕跡はどこにもない。

「……ここは何処だよ……？」

「っ！かなんで俺…抱きつかれてるんだ？」

達也は、後ろから抱きついていて人を見た。

そこには――

「な、な、なんだこのロボット少女はあああああああ……!!!!!!
???」

「うるさい!すこし黙れ!」

達也を捕まえてる女が怒鳴り、そして達也を強く抱き締めた。

「くあwせdrftgyふじこ1p!!?!?」

「たつやあ!!!!貴様あつ!!!!」

「くくくく、さあどうする織斑千冬?」

痛い痛い痛い。

達也は悲鳴を上げた。

普通の女の力じゃない位の締め付けで体中に痛みが走る。

「ぐおおおお!!!くそつ、放しやがれ!!!」

「くく、どうやって抜け出そうというのだ

この最強の兵器“IS”から!」

“IS”?

頭によぎったのは。

be動詞の変化形の1つ。

アイスランドのISO国名コード。

アイドルングストップ (idling stop)

IS / 男でも女でもない性 / 。

インターバル・シグナル (interval signal)

アルテッツァ
レクサス・IS

だがこんなロボットのようなモノ、頭によぎった物に全然当てはまらない。

そうこうしてる内に締め付ける強さが上がり、痛みも増した。

そして遂に達也はあるバ力な行動に移した。

「くそつたれ、は・な・し・や・が・ねええええええええええ！！」

「何を……ごほあつ……！！！！！！」

肘をISという機械に向けて放った。

何かが肘に当たったがそれを破り、キツチリ肘を当て、拘束が緩んだ隙に地面にダイビングした。

「おっし、ナイス着地だ」 あっ！！」

そしてそのまま

[illegible]

見事にズツこけた。

それはもう盛大にズツこけた。

⌋
⋮
⌋

「……………」

「いつ…てえ……………」

余談だが、達也を見る二人の女の人はジト目だったりする。
全身に激痛が走るが普通に耐えられる位の痛さ。

そして達也は痛みを堪え《こらえ》立ち上がり相手を見て拳を構えた。

「イチチ、仕方ない……………」

「……………」第二ラウンドの開始だ」

（何かツッコつけてんだろお前は！）

どこからか秋夫の声がした。

第2話・憑依した俺と誘拐（後書き）

達也「少々急展開過ぎてサーセン」

ランサー「それは善しとして、この過去編はあと何話続くのかを教えやがれ」

達也「そうだな……あと4話は続くと思うぜ」

クーガー「先が長いのは嫌いだぜ」

達也「そんなにスピードを求めすぎるなよクーガー」

カミナ「クーガーからスピードを失くしたら何が残る？

俺から気合を失くす事と同じことだぜ」

達也「ま、たしかにそうだが……」

秋夫「というわけで次回・ISとの初戦闘（子供の姿で）

イグニッションだろ！！」

第3話・ISとの初戦闘（子供の姿で）（前書き）

達也「今回はバトルに力を入れたので話が少々短いです」

前回のISは

『達也っ！大丈夫か！？』

『な、な、なんだこのロボット少女はあああああああ！……！！……！！……！！』

『————第二轮の開始だ』

第3話・ISとの初戦闘（子供の姿で）

「第二ラウンドの開始だ」

その言葉とともに達也は素早く飛び掛り女に向けていつの間にか持っていたナイフを振るう。

それに対して女は自身のIS『トライ・ブレイン』の特殊装備『ブラスター・ビット』

——通称BT兵器のビットを五機射出、ビットにエネルギーレーザーを撃たせ自身も

右手の漆黒の特殊炎熱刀『ブラック・サン』で達也を狙う。

だが達也はその猛攻をすべて避け、あろうことかナイフでISの右肩を傷つけたのである。

「なぜっ!？」

女はその光景に驚かずにはいらなかった。

I絶対防御があるISを、あんな小さいナイフ一本で傷つけられた事と

BT兵器を糸も簡単にかわす。

それはどう考えても無理な芸当だ。

しかし達也は違う。

達也は元の世界でさまざまな修羅場を経験し、更に自身もBT兵器を使用していたのである。

ISに傷をつけるという事は説明できないが。

事実、達也は今も避けつつナイフで女に反撃していた。

女は焦っていた。目の前のこんな子供がここまでやるとは思わなかったからだ。

女が達也に対して油断をしていたか。それは嘘とは言いきれない。何故なら、まだ子供だからだ。

このままではエネルギーが尽きる。接近戦で仕掛けようにもナイフで斬り刻まれるか、首を刈り取られるかだ。そしてこの膠着状態を先に破ったのは達也だった。

ナイフの刀身を起こしてレーザーを躲しつつ女に突撃する。女はビットを自分の前に集中させ弾幕を張り、その間にブラック・サンにエネルギーをチャージし、達也を衝撃波で吹き飛ばそうとするが。

達也はビットを全て破壊し、女の目の前にまで接近しナイフを振るう。

「くそっ！」

辛うじてブラック・サンで受け止めるもその一撃が重く後退してしまう。

その隙を逃さんとはかりに達也が追撃を仕掛ける

女の間合いを一気に詰め寄り素早く一閃した。

一閃した場所は丁度胸のパーツで、そこはもう既に綺麗さっぱり破壊されていた。

第3話・ISとの初戦闘（子供の姿で）（後書き）

秋夫「バトルに力を入れたのに何故こんなにも短いのかをk w s k
だろ」

達也「事情があつて此処までしか出来ませんでした。だとさ」

ランサー「こんな調子で大丈夫か？」

達也「大丈夫じゃね多分」

千冬「次回、第4話・達也、千冬に捕まる
ではまたな」

第4話・達也、千冬に捕まる

ISとのバトルを終えた後、不意に後ろから千冬に抱きつかれた俺はこの世界の自分の家に連行された（千冬に抱きつかれながら）。

「……………」

「……………」

く、空気が重てえ。

だからといってこのまま時間が過ぎるのを待ってられない。
しかたなく話を切り出すことにした。

「あのー、お、お姉ちゃん？」 イイズライ

「……………なんだ」

「……………ううん、なんでもないよ」

「……………そうか」

やっぱり怖え。

このあといろいろと話を聞いたりした。なんでもあの女については、無事タイホされたらしい。ついでに俺は。しかしながら何で俺はこんな事に巻き込まれなきゃいけないんだ。秋夫おゝ助けに来てくれえゝ。

第4話・達也、千冬に捕まる（後書き）

次回予告

あれから数年が経ち、俺は色々あつて藍越学園を受験するはずが、間違つてIS学園の試験会場に入ってしまった
偶然にも受験者用のISを男性でありながら起動してしまった為、IS学園に入学させられた。

次回・IS学園に来たチート野郎

断章・1

薄暗い空間に、大きい机に仕込まれたディスプレイの光が照らしだす。

「全員集まったか？」

「いや、クーガーとカミナが来てないぜ」

その中に佇む人物の一人、リーダーである“御筆秋夫”が点呼を取り、“ランサー”がメンバーの欠員を告げる。

「OH、ジャマジャマ。情報を纏めてたから遅くなったぜ」

「すまねえ、グレンの最終調整をしてたら遅くなった」

ロングコートを着たサングラスが特徴な“ストレイト・クーガー”の言葉に続く様に空間に入ってきたのは上半身に彫られたタトゥーが目印の“カミナ”。これでこの空間にいるのは四人となり、全員が揃った事を示した。

その事を確認した秋夫が話を切り出す。

「ブリーフィングを始めるだろ。先日、謎の穴に吸い込まれた“氏家達也”の捜索についてだろ。クーガー、そっちの方で何か情報は得られたか？」

「いや、駄目だった。警察のデータベースにアクセスしてみたが今の所達也の目撃情報は無しだ」

秋夫の言葉に、クーガーが情報が無いという事を提示した。それに続きランサーが口を開いた。

「こつちのツテにも聞いたがやはり情報は無し。多分だが俺の予測からすると……」

「『達也はこの世界には居ない』だろう？」

「俺もそれを考えてたところだ。第一これだけ探しても見つからないって事はそれしか考えられないからな」

「やはりその意見が一致するだろ……」

ランサーに続き、カミナ、クーガー、秋夫と意見が一致する。

「じゃあどうするんだよ……。あいつが何処の世界に居るか分からないんだぜ……」

「確かにランサーの言うとおりだぜ。何処の世界に居るか分からない以上俺たちも動けねーぞ」

「…………俺に秘策があるだろ…………」

「それはどうゆうことだあ秋夫」

「…現在開発中の“アレ”があるだろ……」

「おいおい、まだアレは試作段階だろうが。どうするんだよ？」

「だからこそだ、急ピッチで製作するしかないだろ…常識的に考えて」

秋夫達は作戦を練っていく。達也を助け出す為の作戦を。

「カミナとランサーは今すぐ製作に取り掛かるだろ。完成次第——
——と武器と車に乗せて起動し、達也の居る座標を特定し、発進してもらっだろ」

「了解した(ぜ)」

「アレさえ完成させれば早くいけるだろ」

「言われるまでもねえぜ！」

「じゃっ、各員持ち場に着くだろ！」

「了解!!」

——兄貴達は、静かに、そして動き始めた。

第5話・IS学園に来たチート野郎

「全員揃ってますねー。それじゃあSショートホームルームHRはじめますよー」

黒板の前でにつこり微笑んでいる巨乳な女性副担任“山田真耶”
先生が自己紹介をしていた。

「それでは皆さん、一年よろしくお願いしますね」

「……………」

だが教室の皆は謎の緊張感に包まれて誰も反応なし。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

うろたえる先生がかわいそうなので助け舟でも出してやろうかと思
ったが、そんな余裕は全っ然無い。

なぜ余裕が無いのかって？。

簡単なことさ。俺以外のクラスメイトが全員女子だからだ。

（あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

『おれは、藍越高校の試験会場に行っただと思っただけ いつものまにかISS学園に居る』

な… 何を言っているのかわからねーと思うがおれも何をされたのか分からなかった…

頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…）

心の中では想像のポルナレフが叫んでいるがそんなことは今はおいでこころ。

（きつい……きつすぎるぞっ……！）

ついでに俺の席は真ん中の列&最前列だったりする。
まあ、そここうしてる内に…

「……くん。織斑達也くんっ」

「うおっ、何だ新手の奇襲か！？」

大声で呼びかけられた。

いきなりの事で思わずどこぞの殺人貴のセリフを喋ってしまったらしい。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？」

ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の

織斑君なんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるか」

「わかったから落ち着いて下さい山田先生。自己紹介するから」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

ため息をつきながらも椅子から立ち、教壇の上にしっかりと立って振り向いた。

今までの視線が一気に俺に向けられているのを自覚する。仕方なしにいつもみたいに自己紹介をした

「織斑達です。好きな物は車、趣味は物を作ったり改造したりすることです

一年間よろしく願います」

なんだこれは。『これで終わりじゃないよね』的な空気は。

しかたない、こうなりやヤケだ――。

「これで終わりです」

「「「「「嘘だっ！！」「」「」「」

IS学園の1年1組のクラスメイトはノリが良いでした。

第5話・IS学園に来たチート野郎（後書き）

次回予告

この世界の俺の幼馴染に話しかけられた達也は記憶をたどりながら話をする。

次回・篠ノ之箒との邂逅

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6593y/>

IS～インフィニット・ストラトス～別の世界の自分に憑依した青年の大活劇

2011年12月5日18時48分発行